

「チュラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学総合人間学部 2年 深谷拓未

①学習成果

「私の母は派手なものが好きなの。お洒落なの」ある現地の女子学生から聞かれた言葉である。

世界遺産であるワット・ポー、ワット・プラケオはじめ、バンコク市内の多くの寺院を訪れ、その度ごとにそれらの色彩豊かな装飾に目を奪われていた。一際目立つ暖色系や濃い緑色を多用するところは、タイの気候風土の影響であろうと確信してしまう。こうした建築物の装飾に象徴的であるが、タイでは「派手なものは美しい」という感覚があり、冒頭紹介した発言は端的にそうした色彩感覚を表していると思われる。

プログラム前から料理は私の最大の関心であった。タイの料理は、辛いことで有名で現にその通りであるのだが、どの料理にも砂糖を使うことが特徴である。西洋の料理とは違って砂糖を多用するのは中華料理や日本料理と共通であって、同じアジア地域の料理の連続性を見た。さらに、タイの人たちは男女問わず、フルーツやジュースなどの甘いものを好み、よく口に入れている。タイ人の先生に聞いたことだが、タイ料理の味づけは辛味、甘味、酸味の3要素で構成されているようだ。辛い食事と甘味や酸味の効いた嗜好品という全体を見れば、その味覚の3要素がバランスよく構成されているのに気づいた。

タイ人の人となりを観察すると、タイ人は対立を避ける傾向にあるということが見えてきた。例えば、語学初学者によく聞く「～は好きですか」という質問文は、タイ語の授業でも、親しい友人間の会話においても、あまり聞かれない。こうした yes/no の質問は個人尊重の意識がなければ仲間の輪を崩しかねないからであろうと思われる。逆に私が好き嫌いを伝えたと、タイ人は正確に覚えてくれたのは印象深い。

以上のように今回の派遣では現地の外から見える部分だけでなく、交流を通じた深い人間理解ができたのではないかと思っている。

②海外経験

タイは文化にせよ人々にせよ、日本との共通点が多く、比較的馴染みやすい国であった。それゆえ大きなカルチャーショックもなく、円滑に生活が営めたという印象である。また、物価が安いいため、日本では頻繁にできない文化体験も気軽に参加できるのは、タイの大きな利点である。

海外で生活するといつも実感するのであるが、だんだんと現地の生活に順応し、自分自身に変化していくのが驚きである。そして回数を重ねればそれだけ変化のスピードも早くなるのである。そう言った意味で今回のプログラムは自身の順応性を高めた。

③プログラム内容

ほぼ毎日3時間以上のタイ語講座をはじめ、日本語によるタイ文化・歴史講座、料理教室、寺院見学会、現地学生との共同発表など、タイ文化を多面的学習するだけでなく、主体的学習も行う。もちろん、タイ語講座が主な授業になるが、それ以外の授業・活動はどれも目新しく新鮮で、興味あるなしに関わらず意義深いものである。

④進路への影響

日本語学科の学生らが、日本語を流暢に話し、多くの卒業生が日本をはじめとする外国企業に就職すると聞いて、感心した。中には日本に来て働く人もいそうだ。グローバル化の中で、進路決定に当たって海外に積極的に挑戦していく姿勢は見習うべきである。私は人類学を専門としているが、異文化介入にはやはり言語力が必須であると再認識した。そういう意味

で、今後専門とする人類学研究における現地言語習得の重要性を再認識し、自己の学習への大きな刺激となった。

未だ進路は明確に決定していないものの、今回のプログラムは、異国の同世代の仲間たちの国境という枠を越えた進路選択を目の当たりにすることで、ますますグローバル化を意識し、そして自分も既存の枠や国境を超越した、広い視野を持って慎重に進路選択しなければいけないという自覚を芽生えさせてくれた。